

答え合わせ・解説 No.9

問1	答え 3 空也	平安時代中期には、国家の加護を背景とした学問仏教や貴族向けの仏教が主流であったが、一方で民間への布教に努める僧侶も現れた。「市聖」と呼ばれたこの人物は、諸国を巡って庶民に阿弥陀信仰（浄土教の信仰）を説き、口称念仏を広めた。また、単に教義を説くだけでなく、道路の開削や井戸の掘削、行き倒れた死者の火葬といった社会事業を実践することで、現世の苦難にあえぐ人々の救済に尽力した。
問2	答え 1 西田幾多郎	主客未分の「純粹経験」を出発点とした西田幾多郎は、のちに東洋的な「無」の概念を取り入れた「場所の論理」を構築した。彼は、すべての実在の根底にある「無の場所」において、対立する多様な事物が矛盾を維持したまま統合されていると論じ、西洋哲学とは異なる独自の日本哲学を確立した。
問3	答え 2 吉野源三郎	『君たちはどう生きるか』の著者である吉野源三郎は、人間が自らの過ちを悔いる（悔恨）という経験を通じて、自らの行動を主体的に決定する自由な存在であることを自覚できると主張した。これは、他律的な生き方から脱し、自律的・主体的に生きることの尊さを説いたものである。
問4	答え 4 石田梅岩	江戸時代中期、商業活動に対する否定的な見方が強かった中で、商人の営利活動を肯定する思想が生まれた。この思想家は、商人の利益を武士の俸禄と同等の正当な対価と位置づけ、商業の社会的意義を認めた。ただし、単なる私利私欲の追求ではなく、「正直」と「儉約」という道徳規範を重視し、他者との共生を図る公正な取引を説いた。この教えは「石門心学」として、当時の町人層を中心に広く普及した。
問5	答え 2 専修念仏	法然は、末法の時代には自力で悟りを開くことは困難であるとし、阿弥陀仏の救いを信じて「南無阿弥陀仏」と口に唱えること（口称念仏）だけを専ら行うべきであると主張した。これを専修念仏と呼ぶ。
問6	答え 2 大和本草	中国の本草学を日本の実情に合わせて受容し、実際に観察した知見に基づいて本書を著した。これは日本の博物学の発展に大きく貢献した。益軒のもう一つの代表作である日用道徳・養生書の『養生訓』と区別して理解する必要がある。
問7	答え 1 八百万の神	日本の伝統的な信仰である神道では、自然のあらゆる事物や現象に神が宿ると考えるアニミズム的な世界観が根底にある。このため、特定の唯一絶対の神を信仰するのではなく、無数の神々の存在を認める観念が生まれた。このような多神教的な土壌が、後に伝来した仏教などの外来の信仰を拒絶せず、自らの生活様式や儀礼の中に柔軟に受け入れる「複教宗教の受容」という日本特有の宗教的態度の形成につながっている。
問8	答え 1 古義学	伊藤仁斎は、後世の注釈（特に朱子学）を排し、『論語』などの原典に直接立ち返ってその本来の意味（古義）を明らかにしようとする古義学（堀川学派）を提唱した。彼は、日常の人間関係における「思いやり」としての「仁」を重視した。
問9	答え 3 北村透谷	自由民権運動の挫折を経験したのち、雑誌『文学界』の創刊に関わった。政治や実業などの「実世界」に対して、精神的・内面的な「想世界」を重視し、そこにおける「内部生命」の充実を説いた。また、キリスト教の影響を受け、精神的な結びつきとしての「恋愛」を、自己を解放し高めるための重要な契機として位置づけた。
問10	答え 1 自然世	安藤昌益は、すべての人間が自ら労働（直耕）して衣食住を自給する平等な社会を「自然世」と呼んで理想化した。これに対し、自ら耕さずに農民の生産物に寄生して暮らす武士などの支配階級が存在する当時の封建社会を「法世」と呼び、厳しく批判した。